

フランスがコモロ諸島に侵入しようとしてイツァンドラの町で戦いが行われている間、ワッジェという男がイツァンドラ地方の村、ヌツジニに住んでいた。彼は村の貧しい人々の中でも最も貧しい人間だった。

ある日、町が住人のために水を配給し、ワッジェの姉妹が家族のために水を少しもらおうと出かけた。彼女がそこに行くと人々は彼女に水を与えることを拒み、彼女のひょうたんは二つに割られた。彼女は悪しざまに扱われ、人々はその貧しさ故に彼女を侮辱し罵った。それでワッジェの家族は煮炊きする水がないので食事をすることが出来なかった。水を配給する仕事をしていた男はワッジェの姉妹と母を罵り、侮辱し続けた。ワッジェが家に帰った時、その男が彼の家族に対して示した悪意の話が出た。彼は言った：

「そういうことなら我々はここを出よう。母さん来てくれ、ヌツジニを離れてイコニに住むことにしよう」。

彼らはイコニ王国に赴き、王に会いに行った。ワッジェは王に言った：

「私は、インヤ・マツワ・ピルサー族のそれぞれの町が、いつかはインヤ・ファムバヤー族の村々と戦うことになることを知っている。イコニが含まれるバムバオはいつか、イツァンドラと戦うだろう。王よ、私はお願いに来た。私は喜んであなたの臣下のひとりとなり、そしてあなたの兵士となる」。

王はワッジェの願いを聞き入れ、ほどなくインヤ・マツワ・ピルサ（イコニ）とインヤ・ファムバヤー（イツァンドラ）の間で戦いが起ころうという気配になった。ワッジェとその部下は戦いのために出立した。ワッジェは部下に言った：

「短刀も剣も持ってくるな。何も持たないように。今日は私が戦いを率いる。銘々が藁藁を根本で結わえたものを持って来い」。

ヌツジニ（イツァンドラ）に着いて彼らは城壁に守られた町を見た。ワッジェは梯子をかけて最初に向こう側に行き、村人が眠っているのを確認してから部下に梯子を順に上って反対側に来よう言った。村の中に着くと、彼らは藁藁をあちこちに置いて火を付けた。ヌツジニ村は燃え上がった。村人たちは飛び起きて自分たちの家が炎に包まれているのを見た。ヌツジニは消滅してしまった。ワッジェと部下は町の門のところに身を置いた。ヌツジニには村の出口がひとつしかなかった。火から逃げるためにそこを通ろうとした村人はすべて首をはねられた。

ワッジェは部下に言った：

「首をはねるひとりひとりにいってやれ《もしお前たちがワッジェに水を与えてさえいれば、今日、水はワッジェの元にあっただろう》」。つまり、彼らがワッジェに水を与えていたならば、彼には火を消すための水が今日あっただろう、という意味である。こういってワッジェは、人を貧しさ故に蔑んではならないということを示したかったのである。ワッジェはヌツジニに復讐を遂げたのだった。